

沙

新加坡出版 于2017年1月1日发行(每周一期) 零售每份 2.00 港币

4  
2017

创刊号(13)



# 梳

能村 研三

## 義母は母

誼 諧 の 僧 が 案 内 や 涅槃 寺

無 防 備 な 背 後 の ま ま に 接 木 せ り

け ふ 雨 水 気 づ き て よ り の 二 度 寝 か な

耳 の 日 は 序 で 習 ひ の ひ と つ か な

先師登四郎が俳句の指導で「俳句に詠む場合、義母を『はは』と読ませたり、『母』の上に義理の、『義』の字を入れたりせず、普通の、『母』として詠め」とよく言っていた。「主人の母」「妻の母」を実母でないことを戸籍の表記のように明確にすることは俳句の上ではいらぬという考え方である。

### 母が煮る栗甘かりし十三夜

### 身ほとりに母ある甘さ霜月夜

この二句は句集『枯野の沖』に収められている句で、前書きには「五年の半身不随の果母逝く。妻の母なれど、ともに暮らせし二十年の歳月を思ひて」と記されている。

つまり私の祖母「きよ」のことで、三月十日の東京大空襲で祖父を亡くし、孤独そのものであった祖母を引き取り父の理解のもとに、私たち家族の一員として暮らした。父は良く婿養子と間違えられたそうだが、祖母を愛情深く看取った父の人間らしい姿勢は素晴らしかった。

憂愁の音に啜るや酢の海雲

涅槃図の巻き皺にある信憑性

霾るや瞬の失語は繕はず

種売りの仏頂面を通しけり

八幡市民会館落慶

式年の杜に春光ホール建つ

産土の恩寵賜ふ銀杏芽に

一部「俳句」「俳壇」掲載句

私にもまだ一人の母がいる。九十六歳になる妻の母で、埼玉県の川口の老人ホームで元気で暮らしていたが、私のスケジュール上川口まで行くのが一か月に一回程度なので、元気なうちに家の近くの老人ホームへ転居することになった。母は元々長く市川で暮らしていたので、中山法華経寺等に花見に行くことを楽しみにしていた。二月中旬、無事船橋の老人ホームへの移送が終わったが、川口にいた半年前から体の不調を訴えており、ホーム入居後三日目に市川の病院に入院することになった。妻や娘は毎日面会し世話をしているが、私も時間がある時に訪ねて、母をばげましている。

私の実母は私が三十三歳の時に亡くなっているが、妻の母とは今年で四十年の縁となる。

病室から返る時に必ず私に「不束な娘をよろしくお願いします」と一言述べるのが習慣である。

一時、「沖」へも俳句を投句してもらったことがあるが、病室にはその時の句が色紙にして飾られている。

能村 研三

# 蒼茫集



天 恵

溯上千津

日だまりに椅子まるく置く福寿草  
都鳥今日鴨川のどのあたり

\*長寿天恵きらきら寒の風しまる  
牛すぢの根菜カレー夜の寒波  
針供養こころに祈り鍼打たる  
春よ来い幸福学の疑似笑ひ  
使ひ艶萩焼碗の景おぼろ  
人たたへ草萌えめでつ天あきらか

包み紙

頓所友枝

青 空

安居正浩

\*黄泉の子の手足動くか春北風  
かくれんぼならば出て来よ春なるぞ  
一山を仏と化して春立ちぬ  
二月や捨つるに畳む包み紙  
駅までの標となりて野水仙  
鎌の刃を全て研ぎ上ぐ雨水かな

白 湯

大畑善昭

青空に散らしてみたき雛あられ  
山彦の返りそこねし余寒かな  
\*ひめごとを隠せぬ春の雪なりし  
売れ残りても鯛焼の尾に力

一月は脱兎のごとし疾く去れり  
作務衣みな膝よりやつれ春隣

\*寒卵ぷりんと割れて誕生日  
雪降れば雪掻く暮し白湯旨し  
春立つや大きあくびの赤ん坊  
また一つ俳誌終刊冴返る

地平線 細川洋子

分度器に地平線あり日脚伸ぶ  
充電の静けさに雪降り積もる  
夕ざりは真水さみずのごとしセロリ噛む  
岩塩一塊含差の春のいろ  
自らの力に消ゆる石鹼玉  
梳る髪の毛艶増す雨水かな

百千の手 千田百里

春興や声先立てて入る酒房  
春宵の壺中の天の飲み仲間  
\*追儼会や百千の手が浮いてゐる  
物干に家族乾されて春動く

春一番性根据えねば流さるる  
土筆野に屈み遥けき日も摘まむ

香り溜り 辻美奈子

思春期の全身が春待ちてをり  
寒さ極みの一層の子の無口  
水仙の香り溜りといふがあり  
昼醒めて春蚕の繭の薄造り  
\*風邪抜けて今朝は気が軽すぎる  
大地乾きぬ露の臺太らせつ

節分の鬼 森岡正作

胸中に燠熾しをり懐手  
落人の裔を誇れり深雪晴  
\*節分の鬼になるため帰宅せり  
日輪を載せ薄氷の離れけり  
鳥雲に入るキューポラの街遣し  
二月来る以下云云と言はれても

愛し得るかも

荒井千佐代

天井絵の緋色うすれて寒波急  
駄菓子屋に日の集まれる小晦日  
癒え祈ることのほか無し冬銀河  
心澄むまで寒星を見つめをり  
\*北開く一と日動かぬ浚漉船  
距離取れば愛し得るかも遊蝶花

春 隣

大川ゆかり

枯蓮折ることにて仕上がりぬ  
寒ぼたん香りのことは触れられず  
裸木の枝の終まで見届ける  
\*小豆粥もしもの話楽しげに  
錠剤のあはきむらさき春隣  
春炬燵時化続く日も良しとして

ダイヤモンドダスト

矢崎すみ子

ダイヤモンドダスト無量寿の無風

樹の骨に日の亘りたる崖氷柱  
啓蟄の土くすくすと動きけり  
春雷や轆轤の上の「土殺し」  
\*釣り人に料峭の月残りけり  
断層の高きに古城春シヨール

腐れ縁

久染康子

腐れ縁とはセーターと静電気  
瓜立てて摘む日表の寒蓬  
冬日燦々翔先生の墓石句へ  
\*裸木の骨格比べ植物園  
凍瀧の瀧壺深く根を張れり  
欄間より光の礫大朝寝

手ざはり

甲州千草

余寒なほ手ざはりやさし再生紙  
窓用の小さな箒つちふれり

\* ウインドー春鰐の頭のやうな靴  
椿拾うてやはり戻してしまひけり  
春を待つ幼ばかりの英語塾  
深き夜の交信盛ん浅蜷噴く

火事跡

林昭太郎

世の中の潤んでゐたる咳の後  
消防車定位置に据ゑ山眠る  
火事跡の静寂を雫して蛇口  
廁紙からから引いて寒明くる  
春雪や硝子ボウルに溶く卵  
\* 蟹缶の薄紙透くる春の雪

一 望

楠原幹子

この頃の子の名が読めず竜の玉  
風花や余白ばかりのパスポート  
さざ波のシャンパン色に冬入り日  
己が殻破つてみよと冬怒濤

\* 完膚無きまでの枯蓮日の淡し  
一望の枯野無尽の詩を蔵す

出来たて

松井志津子

白鳥の飛び立つしぶき珠なせり  
風荒れ来白鳥いかに泊てをらむ  
\* 春の土とは出来たての土竜塚  
春なれや折合ひつきし岩と波  
駅裏に小さき教会かげろへり  
白鳥引く蒼天といふ画布の中

早春

吉田政江

初雪や思考に似たる斑解け  
白梅のまだ蕊を見ず柩出づ  
何か出てきさう早春の砂を掘る  
受験期の山を越えたる日の緩み  
\* 鬼柚子の寝首を搔きし昨夜の風  
改札の吸ひ込む切符春一番

# 潮鳴集



聞き洩らす

大石 誠

臘梅を白寿の母の身ほとりに  
春立つやオムレッツ掬ふ銀の匙  
\* 口開けて亀鳴きにけり聞き洩らす  
息を吸ふオルガン奏者花の冷  
抹茶入りソフトククリーム蔵の町

かくし辛子

七田 文子

\* 混沌と整然の間蟬蚪の紐  
堰落つるしぶきも泡も春の色  
春や春かくし辛子の鼻に抜け  
遣らはれし鬼の集まるガード下  
高階に住みて臙に漂へる

春 菜

和田 満水

湯上がりの馬に掛けやる広毛布  
陰徳を明かさる弔辞四温かな  
直売の春菜の棚にキティーちゃん  
病む妻に朴訥と茹づ春菜かな  
\* 春菜茹づしつづができぬ男なり

播粉木

小林 陽子

浅草に半襟買ふも初昔  
滝凍つる無量の音を凍らせて  
万葉人万葉物語の歩幅になりて冬菜畑  
\* 雪をんな写真嫌ひを通しけり  
真砂女忌や播粉木ことによく動く

鬼やらひ

鈴木一広

雪吊を解く瞬間の心入れ  
あの幅は飛び越せさうな春の川

\*薄氷を踏むも第一反抗期  
三猿のひとりぼつちの日向ぼこ  
鬼やらひ老いたる鬼を追ふも老い

冬木立

七種年男

\*凧を押し込んでゐるラガーシャツ  
引力をばらばらにして木の葉散る  
何本も手を持つつ仏冬木立  
散るや散る三成陣の冬紅葉  
鳴引くや湖を一気に薄くして

冬の底ひ

井原美鳥

\*湯気立てて母許にある昔菓子  
ひとり鳴る鉄瓶冬の底ひかな

ひなたよりひかげ香の濃し梅の花  
浮かれ猫もとより垣のなき御堂  
鷹鳩と化し割印を三つ押す

清洲橋

峰崎成規

\*瞑るまで余生は無用日脚伸ぶ  
風邪籠り捨つる時間と得る時間  
北辰の一途をほぐす臙の夜  
春塵や軋む古書肆の自動ドア  
差し潮や臙の底に清洲橋

二月の橋

菊川俊朗

\*水鳥のとりわけ盗みたき一羽  
猿山に声一つなき寒さかな  
春隣ラー油の匙の小さくて  
渡らねばならぬ二月の橋がある  
雉鳴いて土黒々と光りたる

# 飛鷹選評



能村 研三

傾聴とふひかり呼ぶもの 黄水仙 溝呂木信子

傾聴とは、相手の話を熱心に耳を傾けて聴くことであるが、特に高齢者などの介護・福祉の現場に関わる仕事で使われている言葉である。一人暮らしの高齢者などには相手の話すことを心で受け止めることが必要である。水仙は冬の季語だが、黄水仙は春の季語で、横向きに咲く姿は、傾聴という言葉と何か優しく呼応する。中七の「ひかり呼ぶもの」の把握もすばらしい。

甲冑に凧の顔ありにけり 兵藤 恵

昨年「真田丸」など大河ドラマの影響もあって、戦国ブームが続いている。城が博物館として活用されている所には、必ずと言ってよいほど甲冑が飾られている。甲冑は、刀剣や弓矢を用いた戦闘の際に兵士が身につける日本の伝統的な防具で、甲冑の顔の部分は、顔全部を覆う総面、鼻から下をおおった面頬、顎を守る半頬、猿頬、額から頬を守る半首などからなっている。どれも厳しい表情で、凧の顔というのがぴったりである。

大人への羽化や華やぐ白シヨール 須賀ゆかり

白い羽毛のシヨールは成人式での振袖には定番のようだが、友達の結婚式に呼ばれたときも、白いシヨールを肩からかける清潔感があつてよい。爽やかで少し大人になった気分にもなる。その変化を羽化と捉えたのが面白い。

フェルメール部屋にやさしき冬日差 榎本 秀治

昨年十二月から今年の一月にかけて、東京で「フェルメールとレンブラント展」が開催された。フェルメールの絵は、どれも静か。淡い光が周りを包んでいるように感じられる。代表作は「真珠の耳飾りの少女」「牛乳を注ぐ女」などで、静かな画面から豊かな思いにさせてくれる。どの絵にも冬の優しい日差しが注ぎ込んでいるようだ。

しづる雪勢ひ撥ねる笹のいろ 大石 恵子

樹木などに積もった雪がずり落ちることを「しずり・しずり雪・垂（しず）れ」という。雪が降った時、竹は雪の重みに頭が地につくほど押さえつけられても、強い携りを持って勢よく立ち上がる。何事もなかつたかのように何倍もの太さを誇る杉や松でさえ雪の重みに耐えかねて折れるというのに、竹は笹のいろを取戻し耐え忍ぶことを教えてくれる。

〈以下略〉

# 沖作品



## 能村研三選

真間川の急流と化す冬満月

星冴ゆる眼差しの鋭きミュージシャン

冬木の桜通奏低音よく響き

沙羅の芽の銀の秀こそぞり発光す

傾聴とふひかり呼ぶもの黄水仙

マフラーを二重に沖を見てゐたり

二月はや汚れ始むる月日あり

甲冑に凧の顔ありにけり

絹針の重さありけり寒の月

鶴となる一片の紙春の雪

大人への羽化や華やぐ白シヨール

郵便受け見て足早の懐手

明日また会へる光か霜柱

ただ聞いてくれるやさしさ寒牡丹

しばらくは浜に寝かされ武者絵凧

市川市

溝呂木信子

静岡

兵藤 恵

埼玉

須賀ゆかり

千年の古文書捲り年新た

月山の水の恵みを寒造

寒行の僧のわらぢの薄かりき

フェルメール部屋にやさしき冬日差

初風や能登の棚田の畦明かり

由布岳の白きを仰ぐ今朝の春

航跡の一線を画く初日の出

虎落笛風のタクトで鳴る和音

紙漉きの漣あやす如きかな

しづる雪勢ひ撥ねる笹のいろ

雲裂いて日矢となりたる初日かな

倒影の富嶽ゆるがせつがひ鴨

若やぎて初雪告ぐる媼かな

神の池しばし耀ふ薄氷

ラガーらのしるき証しや耳縮る

茨城

榎本 秀治

大分

大石 恵子

長崎

内田 順治